連載・雑草のよもやま《第 42 回》

イネ科多年生植物サヤヌカグサの図解・記述の多くは雑種サヤヌカグサ（仮称）に相当

森田　弘彦

水田の多年生雑草エゾノサヤヌカグサ（*Leersia oryzoides* (L.) Sw.）について，「（雑草関係者のみならず一部の植物研究家の間でも）・・特に東北地方以南では実物の認識が進んでいないようだ。」と述べた（雑草のよもやま 37，植調 58(6)，2024）。同じ属のサヤヌカグサ（*L. sayanuka* Ohwi ＝ *L. oryzoides* Sw. var. *japonica* Hack.，図 -1）も，エゾノサヤヌカグサに輪をかけて「実物が認識されていない」植物と言える。エゾノサヤヌカグサとサヤヌカグサの間の雑種サヤヌカグサが分類群として示され，小穂の形態と稔性を主とする特徴が提示されたことによって，サヤヌカグサ属植物の取り扱い上の混乱の整理が可能になった（森田　雑草学会 64 回大会講演要旨集，2025）。そこで，イネ科多年生植物のサヤヌカグサの図解や記述を雑種サヤヌカグサと対比して年代順に検討する。

江戸時代末期の幕府の医官，曲直瀬正貞（1809-58：磯野直秀　日本博物学史覚え書，慶大日吉紀要自然科学 31，2002）が稿本「雑艸譜」に，「サマヌカグサ　尾州　ホタルクサ　京（筆者注：マはヤの誤記とする）」と付記した，開出した 1 穂と「同前」と記した抽出途中の 2 穂の 2 枚の彩色図（図 -2：国立公文書館デジタルアーカイブ）が，日本で最初のサヤヌカグサの記載であろう。この 2 枚の図は，日本初の理学博士で，博物学者の伊藤圭介（1803-1901）が，稿本「錦窠禾本譜」の付録として校訂・編集した「曲直瀬正貞自筆本　正本芒類寫真　乾坤」にも収録されたが，開出穂の図ではなぜか最下の枝梗が欠けている（国立国会図書館デジタルアーカイブ）。曲直瀬は地味なイネ科・カヤツリグサ科植物の個々の特徴をよくとらえた優れた図を描いた。しかし，雑種サヤヌカグサの存在（雑草のよもやま 32，2023）を考慮すると，「雑艸譜，芒類寫真」の 4 枚の図は，サヤヌカグサとしては小穂の細長さが足りず，筆者には雑種サヤヌカグサに見える。

1896 年，東京帝国大学植物学教室の松村任三先生は，オーストリア＝ハンガリー帝国のイネ科植物の研究家 Eduard Hackel 氏 (1850-1926) にイネ科植物のさく葉標本を送り，「案外ニモ新種多クシテ氏ハ日本植物ノ未ダ探検不十分ナルニ驚キヌトノ回答ヲ得」て，Hackel 氏の「日本の植物学雑誌に発表しては」との指摘に対して，「日本人ノ拉丁文ヲ解セサルモノヽ為ニハ馬耳東風ノ歎アレバ却テ歐州ノ雑誌ニ登載シテ早ク日本ニ幾多ノ新種ヲ發見セル旨ヲ報知センニハ如カズト余ハ回答ニ及ビヌ故ヲ以テ茲ニハ唯名稱ノミ掲載シテ之ヲ解釋スルニ和名ヲ以テスルノ外ニ出ズ」と記した（日本禾本科雑報，植物學雑誌 130，1897）。「サヤヌカグサ」はこの中に以下のように示された。

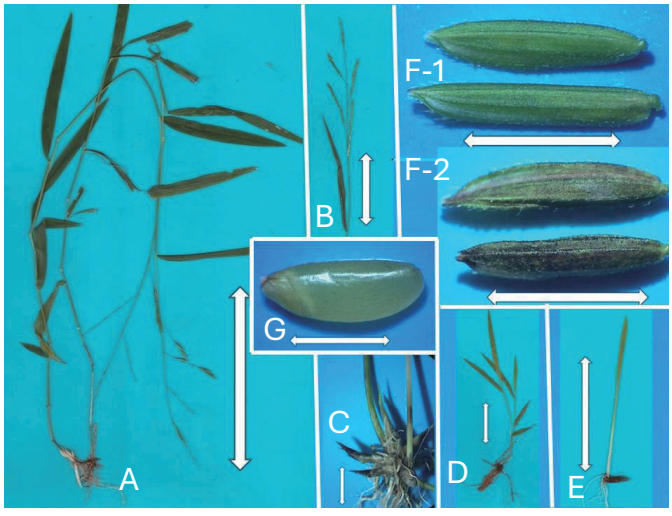


図 -1　イネ科多年生植物サヤヌカグサ（*Leersia sayanuka* Ohwi）の各部の形態
（A：結実期の全形，B：穂　5cm，C：株基部の越冬芽，D：萌芽苗，E：実生苗，F：小穂　-1 開花前・-2 成熟後，G：えい果
スケール：A，B，D・5cm，C，F・5mm，E・4cm，G・2mm）

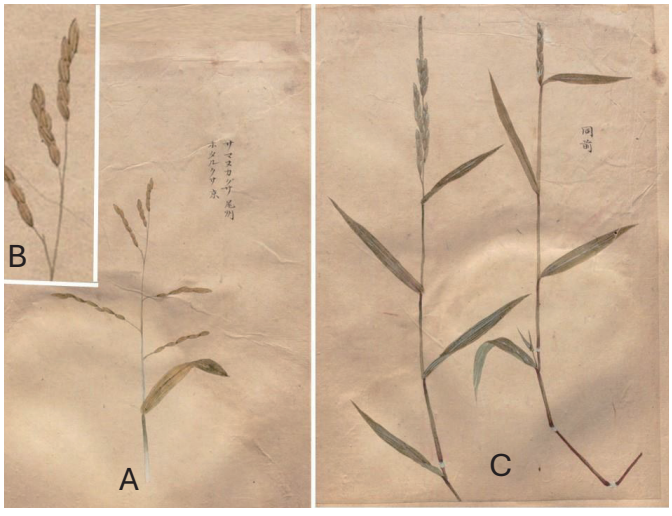


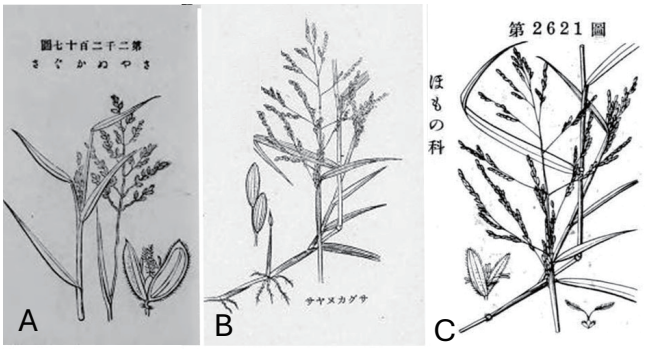
図 -2　曲直瀬正貞（1809-1858）のイネ科植物彩色稿本「雑艸譜上冊」のサマヌカグサの図（A: サヤヌカグサ，「マ」は「ヤ」の誤記，B：穂を拡大，C：「同前」 国立公文書館デジタルアーカイブ https://www.digital.archives.go.jp/img/1238588 から）

A:牧草圖譜
1908
陸軍經理學校

B:植物圖鑑
1908
村越三千男

C:内外植物原色大圖鑑
第10巻
1934
村越三千男

図 -3　明治末期から昭和初期の植物図鑑類での，小穂の拡大図を欠くサヤヌカグサの線画



A:最新圖説内外植物誌
1917　齋田功太郎・佐藤禮介　国会図書館デジタルアーカイブ

B:自彩植物圖鑑
1938　櫻井金一（東京博物學研究会）　国会図書館デジタルアーカイブ

C:牧野日本植物圖鑑
1940　高知県立牧野植物園ホームページ（小穂のない図：日本植物圖鑑1925に掲載）

図 -4　大正から昭和初期の植物図鑑類での,「サヤヌカグサらしくない」小穂の拡大図を持つサヤヌカグサの線画

(22) * Leersia oryzoides, L. var. japonica Hackel. var. nov.
ハ（サヤヌカグサ）ナリ變種ノ新稱ハ今回ハツケル氏ノ創設ニ係ル

ハンガリーにはエゾノサヤヌカグサ（*L. oryzoides* Sw.）が分布する（雑草のよもやま 37）ので，Hackel 氏はさすがに日本からの標本の *oryzoides* との違いに気づいて変種に扱ったのであろう。これ以降，独立した新種 *L. sayanuka* Ohwi と扱われる（大井次三郎　東亜植物資料，植物分類･地理 7，1938）まで「サヤヌカグサ」には上記の学名が使われた。

明治時代の末期から，身近な自然を重視する理科教育を背景に一般向けに多く刊行された植物図鑑（俵　浩三　「牧野植物図鑑の謎」，1999）の中には，種の判定に重要な小穂の詳細図を欠く「サヤヌカグサ」が掲載された（図 -3）。図 -3-A は曲直瀬の図に次ぐ彩色図であるが，サヤヌカグサにしては小穂の着粒密度が高すぎる。その後，次第に小穂の図が加わるようになった（図 -4）が，これらの小穂の図は「長楕円形（牧野富太郎「牧野日本植物圖鑑」，1940）」で，サヤヌカグサとしては「長さ」が足りず，雑種サヤヌカグサの小穂と考えられる。なお，図 -3C，と図 -4B，図 -4C の植物本体の図は共通の構図で，その初出は「牧野富太郎　「日本植物圖鑑」，1925」である。

前記のように 1938 年，大井次三郎博士が「稈の節部の毛茸が極短かくて，葉が軟かくて，しかもその緑邊にも緑毛が全く無く，小穂が細長くてその上にある毛茸も甚だ短かい・・（大井　前出）」点に着目して，エゾノサヤヌカグサから独立した種とした。小穂は，ラテン語の記載文では，「linearioblongis compressis 6-7 mm longis 1.5 mm latis（線状楕円形，扁平，長さ 6-7mm，幅 1.5mm）」と記されたが，全形や小穂の図解や写真は示されなかった。

第二次世界大戦後 20 年を経過して，1968 年に岡山大学の笠原安夫先生刊行の「日本雑草図説，1968」にはえい果を含む「サヤヌカグサ」の図がある。説明文では小穂のサイズに触れていないが，えい果（そう果）について「扁平長倒だ円形・・（中略）・・長さ 3.0 ～ 3.5mm，幅 1.2 ～ 1.52mm，厚さ 0.12 ～ 0.2mm」とあり，外穎の竜骨部の湾曲の著しい小穂の図と併せると，この図はエゾノサヤヌカグサに相当する（雑草のよもやま 32）。

後志地方を中心に北海道の植物を研究された桑原義晴先生は，線画による「日本イネ科植物生態図譜　第 1-4 巻，1975-82」を刊行し，「サヤヌカグサ」を「同図譜　第 3 巻，1977」に収録し，小穂を「長さ 5.5mm-6.5mm」と記して図示した（沼田・吉沢　「日本原色雑草図鑑，p.167」，1968，「桑原義晴日本イネ科植物図譜　p.297」，2008　にも掲載）。この図の小穂の外穎竜骨部はやや湾曲し，またえい果の情報を欠くことから，桑原図譜の「サヤヌカグサ」の図は雑種サヤヌカグサと考える。また，帰化植物に関して多数の著作を残された長田武正先生の精密な線画，「日本イネ科植物図譜，1987」は現在でも日本のイネ科植物の基本的情報源である。ここでの「サヤヌカグサ」の小穂は，「（エゾノサヤヌカグサに比べ）長さのわりに幅が狭く，両面はほとんど緑色で，白色部が狭く，竜骨上の刺状の剛毛が短く，両面の毛も短くてまばらであり，葯はやや長いなど」，「長さ 5-6.5mm，幅 1.6mm」と記述されたが，小穂の図はサヤヌカグサほど細長くなく，また，えい果の情報がない。さらに「慣れていなくとも識別できる」両種を，「葉がやや軟らかく，鮮緑色で，なれると花がなくてもほぼ見分けがつく。」と記述したことから，この「サヤヌカグサ」も雑種サヤヌカグサとするのが妥当である。桑原，長田図譜のサヤヌカグサ図の本稿への転載は控えるので，原本を参照されたい。

なお，長田図譜での「（サヤヌカグサの）染色体は 2n=60」の出典と考えられる文献（平吉　功　稲屬近縁植物の染色體數，遺伝學雜誌 13(3)，1937）には「*Leersia oryzoides* var. *japonica* 葉鞘から穂が全部抽出し切らない場合が多く，未だ嘗て種子が稔ったことを見ない。」と記されており，ここで供試され

図 -5　自生地で出穂時期のサヤヌカグサ（茨城県牛久市）

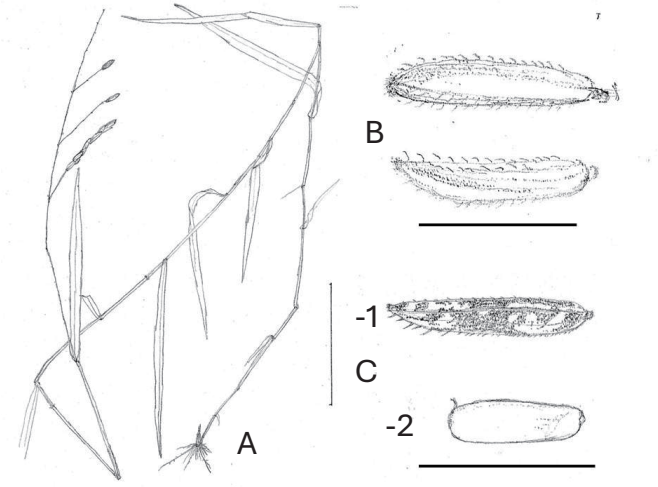


図 -6　筆者の視点でのサヤヌカグサの線画
（A：脱粒の進んだ穂をつけた稈，B: 出穂直後の小穂，C：–1・成熟期の小穂と–2・えい果　スケール：A・5cm，B，C・5mm　茨城県牛久市産）

た「サヤヌカグサ」が雑種サヤヌカグサであったことが推察できる。なお，サヤヌカグサの染色体数はエゾノサヤヌカグサ，雑種サヤヌカグサと同じ「2n=48（保田ら 2023）」である。

和名に関して，曲直瀬の「雑艸譜」では「サヤヌカグサ　尾州（尾張, 愛知県の一部）」とある。方言の「さやぬか」は「ぬか　籾がら。岐阜県武儀郡。（東條　操編　「全国方言辭典 44 版」, 1977）」を意味する。Web 情報では方言の「さやぬか」は「もみがら」で「糠」の方は「こぬか」と区別されるらしい。サヤヌカグサは立派に稔実するので，「もみがらだけ」に着目して曲直瀬が名付けたとすると，これは「雑種サヤヌカグサ」を指すと考えるのが妥当であろう。

写真を用いた植物図鑑類を別として線画による主要な図鑑類で，サヤヌカグサが雑種サヤヌカグサと描き分けられてこなかったことが，この植物の実体把握を妨げてきた，と言えよう。サヤヌカグサ属植物は日本の水田環境において雑草群落の重要な構成種なので，サヤヌカグサについても実体（図 -5，図 -6）に基づいた正確な情報が提供されるよう期待する。（本稿は 2025 年 3 月の日本雑草学会第 64 回大会での「正確に図解されてこなかったイネ科多年生植物サヤヌカグサ」を基に作成した。）